

2024年度入学式校長式辞(20240408)

正門前の千川通りや東門前のソメイヨシノも満開となりました。この春の佳き日に、武蔵中学校ならびに武蔵高等学校入学式を挙行了しましたところ、池田康夫学園長、丸山博子保護者会会長、さらに保護者の皆様方のご列席を賜り、かくも盛大に開催できますことを嬉しく思います。武蔵中学校新入生の皆さん、そして武蔵高等学校入学生の皆さん、ご入学おめでとうございます。武蔵高等学校中学校の生徒・教職員を代表して心よりお祝い申し上げます。また、保護者の皆様におかれましても、ご子息のご入学誠におめでとうございます。心より祝意を表します。

まず、中学校新入生の皆さん、2月11日の入学者説明会以来、久しぶりです。この2か月間、皆さんはどのように過ごされましたか。私の方からは、この2か月間は、小学校時代精一杯伸ばしてきたバネ、引っ張ってきたバネを思い切り緩めてください。そして、入学式のときには、また本気で武蔵の6年間の生活を送れるよう、気持ち新たにきりりとした顔を見せてくださいとお願いしましたが、どうだったでしょう。一息入れた上で、まっさらな気持ちで、そして緊張感をもって今日の日を迎えたでしょうか。いよいよ入学式の日になりました。今日はこれから、充実した武蔵での学びを始めるにあたっての心構えについてお話をします。少し難しいかもしれませんが、皆さんなら受け止められるはずです。気持ちを集中させてよく聞いてください。

そして、高校入学生の皆さん、3月16日の中学校卒業式のときに、皆さんには武蔵での3年間を振り返りながら、心新たに武蔵後半戦の高校生活を送ってほしいという話をしました。今日はこれから3年前に皆さんが入学したときとほぼ同じ話をします。あのときと少し聞こえ方が違うかもしれません。それは成長の証だと思います。「初心忘るべからず」。改めて武蔵に入学した時の気持ちを思い出しつつ、私の話を聞いてほしいと思います。

さて、武蔵は日本で初めての私立の旧制7年制高等学校として1922年に創立いたしました。したがって、今年度は102年目になります。創立者根津嘉一郎は実業家であり政治家でもありましたが、東武鉄道の創設など「鉄道王」として知られました。その嘉一郎が武蔵を創設したのは、1909年渋沢栄一を団長とする4か月に渡る渡米実業団に参加した際に、全米53市を歴訪し、アメリカの資産家が慈善事業に多額の資金を投じる姿勢を目のあたりにし、「社会から得た利益は社会に還元せねばならない」という強い信念のもと、私財をなげうって、将来国家を支える育英、つまり英才エリートを育成しようと考えたからでありました。

以来、武蔵はこれまで、旧制高校時代を含め1万3千人以上の有為な人材を輩出してまいりました。そうした先輩たちは、みな、人生で一度しかない10代をこの武蔵のキャンパスで過ごしてきたわけですが、武蔵では、創立以来の建学の精神として、「三理想」が長く受け継がれてきました。

すなわち「三理想」とは

- 一 東西文化融合のわが民族理想を遂行し得べき人物
- 二 世界に雄飛するにたえる人物
- 三 自ら調べ自ら考える力ある人物

であります。武蔵が創立された1922年と現代の時代状況は異なっており、この「三理想」は現代的な捉え直しをする必要があるとはいえ、グローバル化が進み、先行き不透明なこれからの時代を切り拓く人間を育成する上でも、今も極めて有効な指針となっていることに驚かされます。

さて、私自身のお話をします。私は武蔵50期の卒業です。

私は武蔵での教職経験はありませんでしたが、5年前、高校卒業以来43年ぶりに武蔵に戻ってきました。私もまた、54年前に皆さんと同じこの席に座り、期待と不安をもちながら中学校入学式に参加しました。そして、多感な10代の6年間をこの武蔵で過ごし、我々50期生はそれぞれの進路に散っていきました。そして60歳の還暦を過ぎたことを機に、再び同期の仲間と集うことも多くなり、改めて自分の人生を振り返ってみると、自分の人生の基盤はまぎれもなく武蔵で形成されたことに気づくのです。

ただ、10代という時期は難しい。というのも、「何者にもなれる可能性があるが、まだ何者でもない」。この矛盾を抱えながら過ごす10代を、一体どのように過ごせばよいのか。そのことを真剣にそして本気で考えないと、皆さんの未来の人生はひょっとすると価値のない人生で終わってしまう可能性もあります。世間では、たまに残念なニュースが流れます。高学歴や社会的地位が高い人であっても、愚かな犯罪をしてしまったり、自分本位な行動をとって社会に悪影響を及ぼしたりする人間がいます。

そこで、中学生はこれからの6年間、高校生はこれからの3年間、「何者にもなれるがまだ何者でもない」という、可能性と不安とが入り混じったこの10代をどのように生きればよいのか。そしてたまたま武蔵にめぐり合わせた、たった一度しかない武蔵の10代をどのように過ごせばよいのか。そのことを考える上で、武蔵を卒業した先輩という立場も踏まえ、3つの心がけを、陥りやすい失敗例も交えながら、新入生への歓迎の意を込め

て、これからお話したいと思います。

まず1つ目ですが、「自分が恵まれているという自覚とそのことへの感謝の気持ちを持って」ということです。

皆さんは見事に受験を突破し、この武蔵に入学しました。それは皆さん自身の努力の成果だと思います。でも、本当に皆さんが頑張ったからなのでしょう。皆さんが努力できる環境を用意してくれた保護者の皆さんのおかげではないのでしょうか。武蔵への入学金・授業料、塾へのお金、同時にお弁当作り、「つらい時も励ましてくれた応援」など様々なサポート、そうした物心両面の多大なる支援があったからではないのでしょうか。さらに、皆さんの保護者がそのようなサポートができるのも、そうした収入を保護者の皆さんに与えてくれる社会のおかげではないのでしょうか。そしてそうした支援は、日本中の誰もが受けられるものではありません。皆さんは極めて恵まれた存在なのです。

「いや、僕の家は経済的にも苦しくて恵まれていないよ」という人もいるかもしれません。あるいは「恵まれすぎていることが逆に重荷なんだよ」とか「一見恵まれているように見えるけれど、ちっとも恵まれてはいないんだよ」と反発する人もいるかもしれません。でも、世界には今もなお戦火が絶えず軍事力におびえて過ごしている地域があります。そうした世界で過ごす子供たちに思いをはせたとき、この日本で、この武蔵に入学できたということは、やはり恵まれている存在であると思わざるをえません。

自分は恵まれていると自覚することが、まず何よりも大切だと私は思います。そしてそのことに対して感謝の気持ちを持てるかです。もし、自分の心に手をあてて、感謝の念が持てない自分を発見したら、君はあぶない。その慢心やおごりが、将来思わぬ形で跳ねつかえてくる可能性があると思います。

そして大事なことは「自分が恵まれていると自覚したら、何をするのか」ということです。その恵まれたことによって得た力を、誰のために使うのか。自分のためなのか、社会のためなのか。そこで大きく分かれます。

イギリスの貴族階級に伝えられている精神に、フランス語の「noblesse oblige」という言葉があります。日本語に訳すと、高貴なる者の責務となります。つまり、上流階級に生まれたものは社会で果たさなければならない義務があるという考え方で、イギリスでは第一次世界大戦のときに、貴族の子弟が率先して戦地に赴き、命を落とした割合が高かったといわれています。

同じように、武蔵に入学できた皆さんが、そこで学んだ成果を自分の金儲けや出世のためだけに生かそうと考えるのか、それとも社会のために使おうとするのかは、その後の人生を決定的に変えていくと思います。自らが恵まれていることを自覚し、そのことに感謝し、そして社会のために何ができるかを本気で考える。今お話しした「ノブレス・オブリージュ」の意味を、10代のうちに深く自らに問い、決意を固めることが第一の心がけです。

私は、武蔵生には、将来、様々な分野で「真に信頼され尊敬されるリーダー」になってほしいと願っています。したがって、そのためにもこの第一の心がけは重要だと考えています。

2つ目は「人生をかけての志を持つ」ということです。

「君はたった一度の人生をかけて、何を成し遂げようとしていますか」と問いかけられて、君は答えられますか。もう一度言います。「君はたった一度の人生をかけて、何を成し遂げようとしていますか」。12歳ではまだ難しいかもしれない。15歳でも難しいかもしれません。その答えは、その時々で変わっていくかもしれません。また、なかなか見つからないかもしれません。でも10代のうちに、その都度その都度、その問いかけに向き合い、自分の人生をどうするかという志を立て、自分で自分の人生を決めることが重要だと思います。

例えば、「将来医者になる」というのも素晴らしい志だと思いますが、その際、「どんな医者になりたいか」ということを考えることが、さらに重要だと思います。そこに人生をかけての価値が出てくると思います。お金を儲けてぜいたくができる医者になりたいとか、名声を得て人々からすごいと思われる医者になりたいという考え方もあるでしょうが、人々の心に寄り添う医者になりたいとか、人々に希望を与える医者になりたいという志もあるでしょう。そこに、それぞれの人の「志の深さ」が出てきます。答えは簡単に出ない、あるいは時々で変わっていくものではありませんが、10代のうちから自分の志について考え続けることが大事だと思います。志を立てようとする人生からは価値ある人生は生まれません。私は60年生きてきて、そして色々な人を見てきて、そう思います。

その上で、さらに私からの願いとして、武蔵生には「人類史に貢献せんとするくらいの高い志」をもってもらいたいと思います。

それでは、「人類史に貢献せん」とはどういうことか。

今、人類史は大きな曲がり角に立っています。例えば、政治の面では民主主義とポピュリズムや覇権主義の問題。経済面では自由と平等あるいは格差の問題、科学技術の面ではAIをはじめとするテクノロジーの進展と人間性の確保の問題。そして国際関係ではグローバル化の進展の一方で、民族・宗教間の対立も含め、緊迫する国際情勢の問題。ほかにも、少子化や超高齢化に伴う人口問題、多額の借金を抱えている財政問題、原発処理や気候変動も含めた環境・エネルギー問題など、いずれも人類が発展してきた一方で、それゆえに起きている課題との対立で悩まされています。ここ数年間、私たちが直面してきた新型コロナウイルスの問題やウクライナの問題、そしてイスラエル・パレスチナ問題もまさにその典型です。つまり人類史は大きな曲がり角に立っています。

我々大人世代も、そうした歴史を積み重ねてきた当事者ですので、これらの課題にきちんと向き合うことが必要ですが、責任逃れになってしまいますが、大人はあてにならない。むしろこれらの課題の解決のためには、新しい柔軟な発想ができる、未来を担う皆さんに期待するしかないという面があります。

ぜひ、様々な分野で、武蔵生には、「人類史に貢献せんとするくらいの高い志」を持ってほしい、人類が直面している課題を解決しうる独創的なアイデアと幅の広い柔軟な見方をもってほしい、そして先ほどもお話ししたように、様々な分野で「真に信頼され尊敬されるリーダー」になってほしいと私は願っています。

最後に、3つ目の心がけとして、それでは具体的にどうすればよいのかというお話をします。

それは、改めて「自ら調べ自ら考えよ」ということです。まさに武蔵の三理想の根幹です。

周りの人の意見や世間の常識というものをうのみにしたり、無批判に同調したりするのではなく、まっさらなまなざしで物事を見つめ、自分で問題意識を持ち、自分で調べ、自分で考えることの積み重ねをどれだけできたかということが、人生を豊かにすることを決定づけると思います。言い換えれば、「自ら調べ自ら考える」という「自調自考」のエンジンを10代のうちに自分自身の中にしっかりと装着できるかということです。

「受け身の学び」とよく言います。特に中1の新入生は、おそらく小学校時代、塾に通い、そこで与えられた効率的なカリキュラムを、ご家族のサポートも受けながら、一生懸命こなしてきたことと思います。努力できるという才能は素晴らしいと思いますが、一方で、そのことは、ともすると、他人から強制されないと学ばないという落とし穴に入り込

みます。

学びは決して、人から与えられたから学ぶというのではなく、本来、自らの「好奇心」や「向上心」をもとに、「わくわく」しながら、さらに仲間とも「わいわい」対話を重ねながら学ぶものだと思います。自分の知りたいこと、好きなこと、楽しいことを、「知りたい」「好き」「楽しい」の頭文字を取って、「知好楽」といいますが、自分の「知好楽」は何なのかを掘り下げていく。同時に、正解に早くたどり着くことが学びではなく、簡単に解決できない正解のない問題をどう解決しようかと、あれやこれや考え、みんなで取り組めるようにしていくことが学びの本質です。

先ほど披露された武蔵讃歌は「武蔵大野の果てはあれ、学びの水はとこしえならめ」という歌詞で結ばれます。学びには終わりはない。それは学ぶことによってのみ、自らが成長し続けるとともに、社会の進歩にいささかなりとも貢献できるからだと思います。

一方で、学びに関しても、本当に陥りやすい落とし穴があります。心をこめて2つアドバイスをします。

1つは「基礎基本を軽視するな」ということです。例えば国語・古文なら文法、英語なら基礎単語や熟語、数学なら基本的な定理など、それぞれの分野には基礎基本があります。

武道や芸道では、よく「守破離」という言葉が言われます。お茶や武道が上達するには、まずは「守」、つまり型を守り型を覚えるという段階。次に「破」、つまり型を破り自分であれこれ考え、挑戦する段階、そして最後に「離」、つまり型から離れて自分なりの流儀・個性を発揮する段階。つまり、自分で考えろ、個性を発揮しろといっても、いきなりは無理であり、苦しいけれども基礎基本が型として守られるようになるまで、それを反復して身につける必要があるということです。したがって基礎基本をばかにしてはいけません。時に歯を食いしばっても基礎基本を身に付けることが必要になります。だからこそ、特に「守」の段階に当たる中1中2の授業において、新入生諸君には、日々の授業や予習・復習に、本気の本気で取り組んでほしいと思います。この話を改めて聞いて、しまったと思った高1生諸君がいたら、今からでもまだ間に合います。要は本気度だと思います。

2つ目のアドバイスですが、「知識」だけでなく「知恵」も身に付けろということです。「知識」というのは、机上の学問、つまり本を読んだり授業を聞いたりして頭の中に蓄えるものですが、「知恵」はいわば体験を通してはじめて体得される、生きた知識あるいは

感覚ということが出来ます。頭でっかちではだめ。30代、40代になって社会で活躍する人は、必ずしも学校時代に単にテストの成績がよかった生徒ではなく、テストでは測りきれない、例えばコミュニケーション能力とか、リーダーシップとか、ユーモアとか、直観力とか、調整力とかを持った人物であることが多いと言われます。そのとおりだと思います。

そしてそうした力、つまり「知恵」を身につけるためには、学校生活でいえば、学校での授業以外に、部活動や学校行事、さらに学校外の生活でいえば、海外留学などどんどん学校の外に飛び出して、自分とは生まれも育ちも違った環境の人たちと交流し、協働作業を行い、自分の未熟さを知るとともに、人から助けてもらふ心地よさを体得するなど、自分の世界を大きく広げていくことです。

以上、新入生への歓迎の言葉として、一度しかない武蔵の10代をどのように過ごせば良いのかという点について、大きく3つのことをお話ししました。

1つ目は恵まれていることへの自覚と感謝、2つ目は志を持つことの大切さ、さらには「人類史に貢献せんとするくらいの高い志」を持ってほしいという願い、そして3つ目は「自調自考」のエンジンを10代のうちに身に付けることの意味と、基礎基本を軽視するな、知恵を身に付けろという学びのアドバイスです。

冒頭、私は、50期生の60年を振り返って、その人生の基盤は武蔵で築かれるという話をしましたが、これはどこの環境でも同じですが、人生にとってのプラスの基盤を作るかマイナスの基盤を作るかは、それぞれの人の「気持ち一つ」だと思います。そうした意味から、最後に、これから武蔵の生活に飛び込んでいく皆さんに、私の好きなアメリカの詩人ウィルコックスの「人生の嵐」という詩を贈りたいと思います。

「吹いている風が全く同じでも、ある船は東へ行き、ある船は西へ行く。進路を決めるのは風ではない。帆の向きである。人生の航海でその行く先を決めるのは、なぎでもなければ、嵐でもない。魂の構えである。」

そのとおりだと思います。武蔵には少人数ならではの、人生に刺激を与えてくれる先生方との出会いや、これから一生を共にする仲間たちとの出会いがあります。武蔵は自由で本当に素晴らしい学校です。ぜひ武蔵に吹いているこの素晴らしい風をしっかりとらえて、価値ある人生の基盤をつくってほしいと心から願っています。

最後に保護者の皆様方、改めてご子息のご入学おめでとうございませう。本日確かに、大切なお子様方をお預かりいたしました。教職員一同、責任をもってしっかりと取り組んで

まいります。ただ、私の方から1つだけ、お願いがございます。先ほども申し上げましたように、10代というのは「何者にもなれるけれど、まだ何者でもない」という不安定な時期です。したがって、様々な試行錯誤をしながら生徒は成長していくと思います。また、成長のスピードは人によって違います。大人から見ればヤキモキすることも多いと思います。回り道をぐるぐる回っているときもありでしょう。でも、そのとき、ぐっと我慢して、どうぞお子さんが、もがきあがきながらも成長していく様子を見守っていただければと存じます。ただし、もちろん、とりわけ中学生は未熟な存在だと思います。時に手助けをすることも必要でしょう。そのバランスも心に留められてください。また、ご心配なことなどありましたら、遠慮なく組主任にご連絡をいただき、共に協力しながらお子さんの成長をサポートしていきたいと考えています。このご縁を大切にしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

結びに、ここにいる新入生全員が、3年後あるいは6年後、卒業を迎える日に、「武蔵に入って本当に良かった」と心から思えることを願い、私の式辞とさせていただきます。

2024年4月8日

武蔵高等学校中学校 校長 杉山剛士